

メッセージアウトライン テサロニケ人への手紙 第一 2:5～8 「母のごとく」

[5]「ご存じのとおり、私たちは今まで、へつらいのことばを用いたり、むさぼりの口実をもうけたりしたことはありません。神がそのことの証人です」

「へつらい」…お世辞、おべっか。自分の隠された思いに達する手段として不真実なことばを用いること。しかし、パウロたちはそのようにして人に気に入られようとはしない。→2:4 「むさぼり」…限度以上にもっと多くを得ようとする事。

「口実」…真の動機を隠す言い訳。一見もってもらしい建前の下に本音が隠されている。しかし、パウロたちの伝道活動に関してはそのようなことは決してない。→2:9 以上のことは「ご存じのとおり」とあるように、テサロニケ教会の人々がよく知っており、実際に見聞きしたことであった。ここでパウロたちは神を証人に呼び求めて、「神がそのことの証人です」と断言する。これらのことから、いかに彼らが公明正大であるかがよくわかる。このように生きることは伝道者だけではなく、すべてのクリスチャンにとっても大切なことである。

[6]「また、キリストの使徒たちとして権威を主張することもできたのですが、私たちは、あなたがたからも、ほかの人々からも、人からの名誉を受けようとはしませんでした」

「キリストの使徒たち」…ここでは1:1のパウロ、シルワノ(シラス)、テモテのこと。狭い意味の使徒は→使徒1:22 パウロに関しては→Iコリント15:7-9、ローマ1:1、ガラテヤ1:1、エペソ1:1、IIテモテ1:11

「名誉」(ドクサ)…一般的には栄光と訳される。ここではよい評判、名声のこと。パウロたちはキリストの使徒として権威を主張することもできたが、それをしなかった。→Iコリント9:7-12 これは人からの名誉を求める宗教家たちとは全く正反対の生き方だった。

[7]「それどころか、あなたがたの間で、母がその子どもたちを養い育てるように、優しくふるまいました」

ここにパウロの牧会者としての姿がよく表わされている。

「優しくふるまい」…母が自分の子どもを養い育てるように細やかで行き届いた優しさをもってふるまった。ここから、彼の伝道牧会が単なる義務としてではなく、深い愛から出たものであったことがわかる。そして、その愛は彼自身が神からいただいたものであった。→ヨハネ3:16 私たちクリスチャンもこの愛をいただいた者として行動していくことが大切。

[8]「このようにあなたがたを思う心から、ただ神の福音だけではなく、私たち自身のいのちまでも、喜んであなたがたに与えたいと思ったのです。なぜなら、あなたがたは私たちの愛する者となったからです」

「思う心」(ホモマイ)…非常に強く慕う、同情するという意味。単に職業的な義務から福音を語っていたのならば、とてもこのようなことは言えなかつただろう。しか

も、このような思いはパウロだけではなく同労者であるシルワノとテモテも同様であった。そして、そのような模範はイエス・キリストにあるものであった。→ピリピ 2:6~8、ローマ5:6~8、Iヨハ3:16

テサロニケの人々はパウロたちがそのいのちまでも与えたいと思うほどに愛すべき存在となった。パウロたちがテサロニケに滞在し、彼らに福音を伝え、彼らの中で生活したことにより、彼らに対する愛はますます深まっていった。

私達も神、そしてキリストに愛されている者としてそれにふさわしい生き方をする者でありたい。